

群 教 七	G09 - 02
	平28.261集
	英語 - 中

主体的にコミュニケーション能力の 向上を図る生徒の育成

—段階的な帯活動「Speaking Challenge」
における指導と評価の工夫を通して—

特別研修員 長竹 智宏

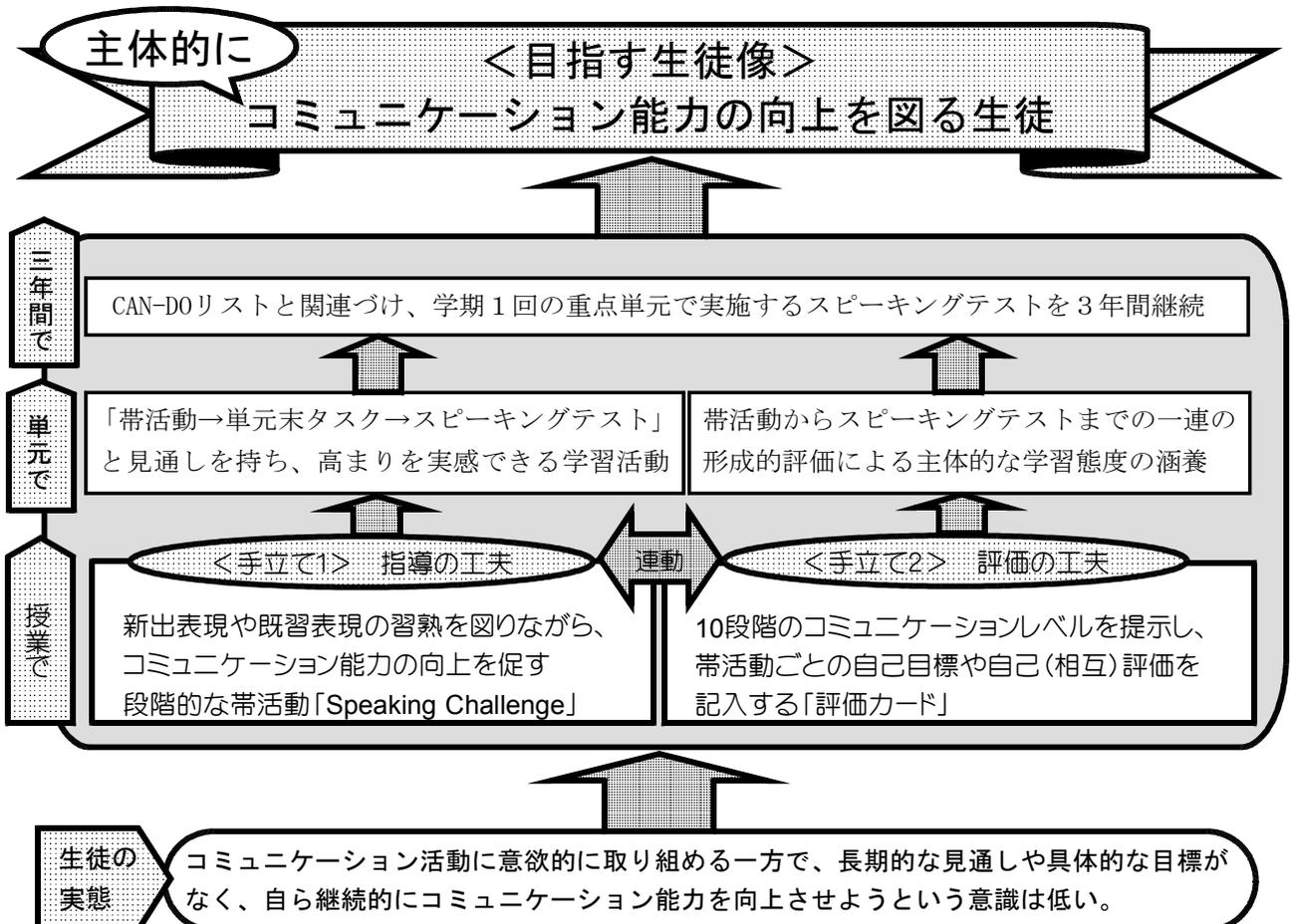
I 研究テーマ設定の理由

グローバル化に対応した英語教育改革が進む中で、学校教育では小・中・高を通じて英語でのコミュニケーション能力を更に強化し、自律した英語学習者、さらには国際社会の中で英語を活用していくことのできる人材を育成することが求められている。そこで小・中・高の学びのつながりを意識しながら、中学校段階での効果的なコミュニケーション活動やコミュニケーション能力の評価の在り方を研究し、主体的にコミュニケーション能力の向上を図ろうとする生徒を育成することは追究する価値のあるテーマであると考えた。

生徒たちの多くは、教師が設定したコミュニケーション活動やスピーキングテストに意欲的に取り組めるが、長期的な見通しの中で、具体的な目標を継続的に意識して学習することはあまりできていない。そこで、帯活動の継続を軸に、学習の見通しを持ち、自身の目標設定や振り返りを重ねながら、主体的にコミュニケーション能力の向上を図ろうとする態度を育むことで、自律した英語学習者の育成につなげたいと考えた。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

主体的にコミュニケーション能力の向上を図ろうとする態度を育成するために、次の二つの手立てを設けた。

①指導の工夫： 単元の学習を見通し、単元末のゴールにつながる帯活動「Speaking Challenge」で、新出表現や既習表現への習熟を図りながら、コミュニケーション能力の向上を段階的に促す。

②評価の工夫： 「評価カード」に10段階のコミュニケーションレベルを提示し、毎回の帯活動で目標設定及び自己（相互）評価 をすることで、主体的にコミュニケーション能力の向上を図る。

単元末において、それまでの帯活動で習得した表現の活用を促すコミュニケーション活動を設定した。その際に、教科書の内容との関連を図りつつ、生徒がより興味を持って取り組むことのできるタスクを設定し、4技能を統合した言語活動が1時間の中でできるように配慮した。そして、そのタスクでの取組がその後のスピーキングテストに生きるようにした。単元の到達目標としてこれらを意識し、「帯活動→単元末タスク→スピーキングテスト」と生徒が学習の見通しを持ち、学びの高まりを実感しながらコミュニケーション能力の向上を段階的に図れるように、帯活動「Speaking Challenge」で対話練習を継続した。

帯活動を始める際に「評価カード」に載せたコミュニケーションレベルを意識させ、活動後に「今回、意識したこと」や「次回、意識したいこと」を記録した。また、「評価カード」には、達したレベルの自己（相互）評価やスピーキングテストの結果も記入した。このように、帯活動からスピーキングテストまでの形成的評価を通して、主体的にコミュニケーション能力の向上を図る学習態度を促した。

段階的な帯活動を単元末タスクやスピーキングテストにつなげる指導は、学期に1回、重点単元を設けて行った。これは生徒に配付した「CAN-DOリスト」の「話すこと」の到達目標とも関連づけ、中学校3年間を通して、毎学期継続していくという前提で、より意識を高めて取り組むように促した。また、学期に一回の重点単元後に、主体的にコミュニケーション能力の向上を図ろうとすることができたかどうかを、単元ごとの「振り返りシート」で自己評価させた。このシートでは、単元の目標の到達状況や家庭での学習取組状況も確認し、主体的な学習態度の涵養につながるように支援した。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- ほぼ全員の生徒が、単元が進む中で、帯活動の10段階のコミュニケーションレベルの数値を向上させた。振り返りの記述からも主体的に向上を図ろうとする態度が感じられた。また、70%以上の生徒が、帯活動を通して、「自らコミュニケーション能力の向上を図ることができた。」と回答した。
- 単元末タスクでは、95%以上の生徒が、「Speaking Challengeで練習してきたことをALTへのインタビューで生かした。」と回答し、ほとんどの生徒が帯活動で学びの高まりを実感できたと言える。
- スピーキングテストでは、十分満足できる評価を得た生徒の割合が80%以上であった。積み重ねたSpeaking Challengeでの帯活動やそれを生かした単元末タスクがコミュニケーション能力の向上に効果的であったと言える。

2 課題

- 「評価カード」に載せるコミュニケーションレベルを、「CAN-DOリスト」の学年ごとの「話すこと」の到達目標に合わせて調整することが必要である。また、10段階で提示したコミュニケーションレベルの内容やスピーキングテストの評価方法の妥当性について、今後も検討する必要がある。
- 「評価カード」に自己評価を書くことが負担とにならないようにする。そのために、書式を工夫して容易に評価できるようにしたり、相手について分かったことを英文で書いて伝える活動をより多く取り入れたりすることが、限られた授業時間の中では有効だと考える。

実践例

1 単元名 Lesson 5 Our New Friend (第1学年・2学期)

2 本単元について

本単元の学習で、中学校で学習するほとんどの疑問詞が出そろい、コミュニケーションにおいて、より具体的な問答が可能となる。さらに、代名詞の目的格を学習することで、文のつながりをより意識した表現や理解が可能となる。新しいALTが2学期に赴任したため、疑問詞を含むQ&Aの知識を活用して、インタビューすることは、お互いをより良く理解するための場面設定として有効であると考えた。そこで、本単元の終末に、単元末タスクとして、「先生へのインタビューを記事にしよう」というコミュニケーション活動を設定した。それに向け、帯活動「Speaking Challenge」で疑問詞を含むQ&Aを繰り返し、既習の知識の確実な定着とコミュニケーション能力の段階的な向上を図る。単元末タスクでは、グループで協力してALTに1分間のインタビューをするという「聞く」・「話す」活動を、対話文形式での記事を作成するという「書く」活動、友達の書いた記事を「読む」活動へとつなげる。単元後にはALTとのスピーキングテストとして、1人1分間ずつALTへのインタビューを行う。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	疑問詞who, when, whereや代名詞目的格の用法を正しく理解し、それらを使ってALTに質問したいことを考えて尋ねたり、分かったことをもとに対話文を書いたりすることができる。	
評価 規 準	コミュニケーション への関心・意欲・態度	疑問詞who, when, whereや代名詞目的格を含む文を用いて、自然な会話の流れで積極的に相手とやりとりしようとしている。
	外国語の 表現の能力	疑問詞who, when, whereや代名詞目的格を含む文を用いて問答したり、分かったことを対話文形式で書いたりすることができる。
	外国語の 理解の能力	疑問詞who, when, whereや代名詞目的格を含む文を理解し、教科書本文や相手が言った英語の内容を適切に理解することができる。
	言語や文化に関する 知識・理解	疑問詞who, when, whereや代名詞目的格の用法を正しく理解することができる。
過程	時間	主な学習活動
導入①	第1時	・疑問詞whoを用いた文の導入
習熟①	第2時	・Lesson 5-1の内容理解
導入②	第3時	・代名詞目的格の導入
習熟②	第4時	・Lesson 5-2の内容理解
導入③	第5時	・疑問詞when, whereを用いた文の導入
習熟③	第6時	・Lesson 5-3の内容理解
単元末タスク	第7時	・ALTへのインタビューと対話文作成

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全7時間計画の第7時に当たる。本単元の新出表現である疑問詞（who, when, where）や代名詞目的格を活用するとともに、帯活動「Speaking Challenge」で高めたコミュニケーション能力を発揮する機会として、単元末タスク「先生へのインタビューを記事にしよう」という学習課題を設定した。そこで、前述した手立て①・②を次のように具体化した。

①指導の工夫

- ・帯活動の初めに、コミュニケーションレベルの最終段階として、モデル対話を模造紙で確認する。
- ・単元末タスクでは、帯活動にならってALTへの1分間インタビューをグループで行い、聞き取った内容のリプロダクション（再現）として、対話文作成を行い、スピーキングテストにつなげる。

②評価の工夫

- ・帯活動では、促したコミュニケーションレベルに達した生徒や以前よりも向上した生徒を賞賛する。
- ・単元末タスクでは、帯活動の成果の発揮を促し、生き生きと問答や発表ができた生徒を賞賛する。

4 授業の実際

(1) 段階的な帯活動「Speaking Challenge」

<Q&Aリストについて> (図1)

- ・学期に一度の重点単元を決め、その単元の新出表現と既習表現をなるべく網羅させた。
- ・Yes/No Questionsと疑問詞で始まる疑問文の両方を含めた。
- ・[] 内の語は入れ替えるものとして示した。
- ・ALTへのインタビューを見すえ、話題を設定するとともに、話題ごとに自然な流れの対話になるように文を並べた。

Speaking Challenge II (B:話題に応じた疑問文)		
★Q&Aリストを活用しよう! → []の中の語句は置きかえ可。()の中の語句		
Topic	No.	Questions → Answers
食べ物	1	Do you like [school lunch / Japanese food / natto]?—Yes, I do. / No, I don't.
	2	What [school lunch / Japanese food] do you like?—I like [cacao bread].
	3	Do you cook at home?—I often cook at home.
	4	Are you good at cooking?—Yes, I am. / No, I'm not.
	5	Where is your favorite restaurant?—It's [Cocos].
音楽	6	Do you [like / play / listen to] music?—Yes, I do. / No, I don't.
	7	What kind of music do you [like / play / listen to]?—I [listen to] [rock music].
	8	Are you good at music?—Yes, I am. / No, I'm not.
	9	Who is your favorite musician?—[The Beatles] is.
	10	Whose songs do you like?—I like [Fukuyama Masaharu's] songs.

図1 Q&Aリスト「Speaking Challenge」(抜粋)

<段階的な指導について>

- ・帯活動ごとに次のような段階を踏み、ポイントを伝え、コミュニケーションのスキルアップを促した。

第1段階：教師の後について音読させながら、読みと意味の確認をし、分からないものをなくす。

単元で未習の表現は、確認をした上で、リストで追加する。

第2段階：リストを見ながらずらすと(目標=1分間で10問)、ペアで問答できるようにする。

第3段階：リストから目を離し、Read & Look upをして、アイコンタクトをとれるようにしていく。

第4段階：リストの順番にとらわれず、リストの言葉を替えながら、尋ねたいことを質問していく。

第5段階：相手の発言に対し、反応や感想を加えながら、生き生きと対話ができるようにしていく。

第6段階：自然な対話が続くように(目標=1分間)、即興的に内容を掘り下げて対話をしていく。

- ・上記の第2段階以降の帯活動は、授業冒頭の10分間を目安にして、次の①から③の順に行った。

- ①ポイントの確認
- ②ペアでの対話練習(左右、前後で互いに問答、1分×4)
- ③自己(相互)評価の記入

- ・対話練習では、「学び合いペア」という意図的なペアを作り、一方をリーダー役にし、学び合いを促した(図2)。



図2 ペアでの練習

- ・本時の帯活動は上記の第5～6段階で、その後続くALTへのインタビューで扱う話題で練習した。その際に、授業冒頭でALTとJTEとのモデル対話を模造紙で提示し、自然な対話の流れや反応や感想を加えることを確認した。左右のペアの練習が終わった時点で、ポイントを意識してできた生徒を賞賛し、続く前後のペアでの練習後、相互評価し、コミュニケーションレベル(図3)が向上した生徒を賞賛した。

授業でも家ででも練習を重ね、ステップアップを図ろう!	
Step 10	自分の感想等を加えつつ、1分間問答を適切に継続できる。
Step 9	話題に応じて、自然な流れとなる問答が適切にできる。
Step 8	アイコンタクトや反応を心がけて、生き生きと適切に問答できる。
Step 7	様々な種類の疑問文を使いながら、適切に問答ができる。
Step 6	質問したい文や言葉を選びながら、適切に問答できる。
Step 5	Q&Aの言葉を入れ替えながら、適切に問答できる。
Step 4	Q&Aリストの英語をRead & Look upで、問答できる。
Step 3	Q&Aリストの英語ですらすら読み、問答できる。
Step 2	Q&Aリストの英語の発音と意味が全てわかり、問答できる。
Step 1	相手に届く声で、コミュニケーションをしようとする事ができる。

図3 コミュニケーションレベル

(2) 主体的な学習を促す「評価カード」

- ・評価カードに10段階のコミュニケーションレベルを提示するとともに、帯活動とその先の単元末タスクやスピーキングテストのつながりを明示し、学習の見通しや目標を持たせ、主体的な学習を促した。
- ・帯活動ごとに自己(相互)評価と次回の目標設定を継続することによる、スピーキングテストに向けた形成的評価を通して、主体的にコミュニケーション能力の向上を図ろうとする態度の涵養につなげた。
- ・帯活動を重ねることで、ほぼ全員の生徒がより上の目標を意識し、「達した段階」を高めた(図4)。

Speaking Challenge II 評価カード					1-/No.
授業や家での練習後に自己評価(相互評価)を書き、ステップアップを図ろう!					
回数	日付	達した段階	今回、意識したこと	次回、意識したいこと	
1	8/30	3	Read & Look up	文や言葉を入れ替えたり話し!	
2	9/30	4	②や言葉を入れ替えたり話し!	英語をすらすら話し!	
3	10/3	4	英語をすらすら話し!	アイコンタクト	
4	10/4	5	アイコンタクト	答える時に言葉を変えろ	
5	10/5	5	答える時に言葉を変えろ	相手の答えに対する反応	
6	10/11	6	Read & Look up	相手の答えに自分の反応	

図4 主体的に向上が図れる評価カード

